城郭探訪

まちづくりと城の址

掛川市 掛川三城

徳川、今川、武田のロマンと夢舞台「掛川三城」

掛川市長（静岡県） 久保田 崇

歴史と伝統が息づくまち「掛川」

令和6年、掛川城天守閣開門30周年を迎える掛川市は静岡県の西部、東海道のほぼ中間に位置し、市の北部には南アルプスの山々、中南部には遠州灘に面した砂浜海岸が広がる、海・山・街道がつながる人口約11万6000人の自然豊かな美しいまちです。主な特産品として、茶、イチゴ、バラがあり、特に茶産業では日本一の深蒸し茶産地として知られ、全国茶品評会では、最多となる4年連続、通算25回目の産地賞を受賞しています。

掛川の歴史は、まさに城と街道の歴史で、戦国時代には戦略上の重要な拠点として、掛川城、高天神城、横須賀城の三つの城が築かれ、徳川家康、今川氏真、武田勝頼をはじめとする多くの武将たちがこの地をめぐる覇権争いを繰り広げました。そして、旧東海道の掛川宿・日坂宿が宿場町として栄えるとともに、相良と信州を結ぶ「塩の道」の拠点でもありました。城を中心に形成された城下町は、500年余りに及ぶ歴史を持っています。

また、東名高速道路、東海道新幹線など日本の大動脈が集中し、関東・関西の両経済圏にアクセスしやすく、その特性を生かし製造業をはじめ各種産業がバランスよく展開している県中東遠地域の中核的存在のまちであります。

徳川・今川・武田の攻防の地「掛川三城」

令和5年NHK大河ドラマ「どうする家康」で、家康ゆかりの地として取り上げられた掛川城、高天神城、横須賀城の掛川三城は、三河の徳川氏が駿河の今川氏、甲斐の武田氏と攻防を繰り広げた戦略上の要衝となります。

家康は、永禄11（1568）年に今川氏真が籠城する掛川城攻めを行ったのに始まり、天正9（1581）年に武田の勢力下にあった高天神城を落城させるに至るまで、実に掛川市周辺の統治に13年程度要しました。また、家康は、高天神城攻めの拠点として横須賀城を築くなど着々と勢力を固め、遠江の完全支配を成し遂げました。

天正18（1590）年に天下統一を果たし

両頭の城　玉石積みの横須賀城

た豊臣秀吉は、家康を関東に移し、配下の大名として、掛川城に山内一豊（やまうちかずとよ）、横須賀城に渡瀬繁詮（わたせしげあき）を入城させました。掛川城の天守閣、横須賀城の石垣が整備されたのは、まさにこの頃となります。

「掛川三城」の整備・活用とまちづくり

掛川市では、市のシンボル「掛川三城」の整備を進めています。

掛川城天守閣は、市民や市内企業をはじめとした皆さまからの熱い思いとご寄付をもとに、平成6年に400年以上の時を経て、「東海の名城」とうたわれた美しさそのままに、日本初の「本格木造天守閣」としてよみがえりました。天守閣開門30周年を迎えるに当たり、復元当時の清らかな姿や美しい石垣で多くの皆さまをお迎えする準備が整いました。

徳川と武田の決戦の山城、横田甚五郎が抜け去った尾根道「犬戻り猿戻り」など、いにしえの戦国ロマンが息づく高天神城は、令和4年にAR・VR（拡張現実・仮想現実）の最先端の技術を生かしたアプリ「バーチャル攻略高天神城」とWEBサイト「今、よみがえる高天神城」、令和5年に常葉大学造形学部とコラボして作成したマインクラフト「高天神城！」をリリースし、往時の勇壮な姿を再現するとともに、さらなる魅力の向上に取り組んでいます。

河原石を積んだ玉石垣が歴史の面影を残す横須賀城は、令和5年度に国史跡として公有化が完了し、今後、保存活用計画の策定など、令和10年の築城450周年に向けた取り組みを進めていきます。

アニバーサリーイヤーとなる令和6年、掛川城天守閣開門30周年を市民の皆さまとお祝いできるような記念イベントで盛り上げ、引き続き「次世代につながる持続可能なまち」を目指してまいります。

難攻不落の山城　CGでよみがえった高天神城

東海の名城　掛川城天守閣

歴史探訪コラム　城と都市のでんせつ

江口知秀
建設産業図書館 学芸員

霧吹井戸

掛川城天守台の脇に、霧吹井戸と呼ばれる井戸がある。今でも水が溜まっており、しかも深いらしい。この井戸は、敵が攻めてくると霧を吹いて城を覆い隠したという。それゆえ、掛川城を「雲霧城」ともいう。このような霧が城を隠す伝説は、他にも伝えられており唯一無二ではないが、掛川城の霧吹井戸については、井戸掘り当時の様子が、中世の手記に残されていることが珍しい。

『遠江史蹟瑣談 巻1』（明治41年刊）によれば、室町時代の連歌師・宗長の紀行文『宗長手記』にその記録があるという。実際に見てみると、なんと宗長は井戸の完成から、わずか4、5年後に掘削当時の話を聞いたらしい。よって井戸はまだ霧を吹いておらず、霧吹井戸の文字はない。では、どうしてこの井戸が霧を吹くことになると『遠江史蹟瑣談 巻1』の著者は判断できたのか。理由は明らかではないが、察するに掛川城には築城以来、井戸は一つしかないのだろう。

さて、室町時代のこと。朝比奈泰熙（やすひろ）が掛川城を築いたが、高台ゆえ井戸を掘りかねた。種々の道具を使って試し、一、三百日たって土に蛙や蛇が混じってきた。さては水源が近いと掘り進め、ようやく水脈にたどりついた。そこは麓の川の底と同じ深さで、水を汲み上げる縄の長さは千尺におよんだという。

時期的に考えてこの話には、それなりに信憑性があると思われる。しかし、千尺といえば、約300mなのでさすがに盛りすぎではないか。おそらく深い井戸をうがった苦労が、縄を大きく伸ばしたのだろう。